表紙
小林英樹
《向こう向きの画家》 合成樹脂使用 1940 × 1303mm

表紙絵解説

1983 年頃から、わたしは『DEEDS of COLORS（色彩行為）』と銘打った作品を制作してきた。連続する行為と行為、その間に生まれる「間」が作り出す時間の流れのなかに身を置き、湧き上がるバイオリズムに身をゆだねて行為は続く。Nothing is fine. Nothing is everything. 創造理念というより当時のわたしの標語のようなもの、試行錯誤の末、結局何もなくてもいいんだと何もないことを肯定的にとらえた開き直りの生き方である。だから、最後の拠り所である湧き出る創作意欲が消えれば、そこですべては終息する。そして、もしそうなら、それでもいいと納得することにした。いまのわたしも、その延長線上にある。

今回の表紙絵の根底にあるものは、「いま目の前にあるものはいずれ消えていく。現実とは幻のようなもの」という漠然とした実感を抱きながら経過した時間のなかから生れたものである。図柄はフェルメールの《画家のアトリエ》のなかの後ろを向く画家の姿を借用したが、当時のわたしに気になり惹きつけられる何かがあった。色彩行為の理念の脈絡のなかに自然に収まり、用意した漠とした空間を描いた下地の上に淡々と制作は進み、1 時間足らずで終了。

画面上無数に尾を引きながら飛び散り、垂れ落ちる合成樹脂の絵具、連続する行為と、行為と行為の間に生まれる「間」がフォルムを創り出す。そのフォルムがわたしの根底にあった「万物は消えていく」世界を表出してくれていたので、それ以上の加筆の必要性はなかった。人生の晩年を迎えたわたし、誕生と過程を経て終焉を湛える。その全プロセスは幻のようである。

小 林 英 樹